

アカマツの生育を脅かす病害虫

私たちの生活に身近なマツ林は、長い間人の手により維持されてきましたが、燃料が薪や炭から石油やガスに代わり、利用されなくなり、手入れが行き届かなくなっています。このような状況の中で、江戸時代には存在しなかったアカマツの生育を脅かす病害虫の防除対策を踏まえつつ、中山道の昔日のおもかげを今に伝える笠取峠のマツ並木のアカマツを守っていくことが重要でもあります。

そこで、今回は、笠取峠のマツ並木でも発生している病害虫について紹介させていただきます。

山のアカマツなどが夏から秋にかけて赤くなって枯れてしまう松枯れが多く見られます。これは、皆さんもご存知の「マツ材線虫病」と呼ばれる病気で、マツノザイセンチュウという線虫がアカマツに感染することで枯死するものです。病気発生の源であるマツノザイセンチュウ（以下、センチュウ）は、マツノマダラカミキリ（以下、カミキリ）によって運ばれます。マツ材線虫病にかかったマツは、樹脂（松やに）がほとんど出ないか、まったく出ません。**(図参照)**

これはセンチュウが樹脂の通り道の柔らかい細胞を壊してしまい、樹脂が流れなくなるためです。この症状はマツが完全に枯れる前から現れるので、マツの幹に直径1.5cmほどで樹皮を切り取る深さの穴をあけ、その穴から流れ出る樹脂の量によって、病気にかかっているかどうか判断できます。

一方、アカマツの枝や幹に寄生し、枝が下垂れやねじれ、旧葉の黄変や脱落が多くなり、樹勢を衰退させるのは、マツモグリカイガラムシです。マツモグリカイガラムシの成虫が枝や幹に長い口を差し込み、吸汁することで、枝枯れ、成長阻害が起ります。

笠取峠のマツ並木では、マツ材線虫病とマツモグリカイガラムシによる被害があり、被害の拡大を防ぐために、薬剤散布等を定期的実施しています。

病害虫対策については、今後も薬剤散布等を実施していきますが、アカマツの生育環境を整え、元気で健康なアカマツを育てることが、マツ材線虫病からアカマツを守る方法のひとつとして考えられているようです。私たちの暮らしが変わってきた中でマツ林の手入れをしていく機会が少なくなっていると思われます。今後、笠取峠のマツ並木の手入れについては、地域の皆さんの力をいただきながら、大切に受け継いでいけるようにしていきたいと考えています。



マツ材線虫病のアカマツ

図 樹脂の出方による診断

(小田氏より・一部改変)

異常なし		異常あり		
樹脂がたまり時間がたつと流れ出る。	左よりやや少ないと思われるもの。	部分的に粒状に出る程度。	微粒が若干あり、ねばり気があるもの。	ねばり気がなく乾燥ぎみ。

出典：財団法人日本緑化センター「マツ再生プロジェクト」

マツモグリカイガラムシの成虫



出典：財団法人日本緑化センター「松を守ろう」